

陸機と「楚」

——聲律意識の形成について——

木 津 祐 子

同志社女子大學

初 め に

陸機または陸雲の作品をとらえて、時人が「楚」と評したことは、よく知られている。陸雲の「與平原書」に自らの文を指して「音楚、願兄便定之」と語り、また張華の言として引く「兄文故自楚」、さらに、『文心雕龍』聲律篇に「及張華論韻、謂士衡多楚。文賦亦稱、知楚不易」とあるように、おそらくそれは一般的な評價だったのである。ところが、この「楚」という語が具體的にどのようなことを指しているのか、これまで必ずしも明確にされてこなかった。一方で、齊梁の間に文章における聲律を根本的に整備し、始めて「四聲」に注目した沈約らに二百年先がけ、「音

聲の迭いに代わるに暨びては、五色の相宜ぶるが若し。逝止の常無しと雖も、固より崎嶇として便しくし難し。苟に變に達して次を識らば、猶お流れを開きて以て泉を納むがごとし」と、文章の音聲美に言及し、南朝の文人に聲律を語ることがばを與え得た人物としても陸機は記憶される。

當時、當意即妙の受け答えを人々が楽しんだらしいことから、韻律への自覺は育ちつつあったと考えてよいであろう。しかし、それを理論の域に推し上げようとした、陸機の鋭敏な聲律への意識は、陸機個人の先見的資質による所がやはり大ではあったのだが、一方で、彼をとりまく當時の南北人士の関わりの中でその聲律意識の形成を考えてみることも必要であろう。その際、その作品の音韻的特徴、そして陸機及び陸雲の音韻を形容する語としてしばしば使われる「楚」ということばが一つの手がかりを提供してくれる。音が「楚」であると指摘される陸機と、初めて文の聲律を論じた陸機とは、どのように結びつくのか、それを探っていくと、聲律への意識が目覺め始めたこの時代の、一つの側面が見えてくるのである。

一 「楚」という評價について

冒頭に引用した陸機陸雲の詩に對する「楚」という評語を理解するために、まずその用例をたどってみよう。「楚」という地名は、『史記』貨殖傳に、「越、楚則有三俗、夫自淮北沛・陳・汝南・南郡此西楚也、……彭城以東、東海・吳・廣陵、此東楚也、……衡山・九江・江南・豫章・長沙、是南楚也」と定義される。項羽が西楚霸王と自ら名乗り、梁・楚の九郡に君臨したというのは、ここである三楚すべてにまたがる廣大な地域を指すのであろう。また、『漢書』地理志は、楚から吳を分かち、楚を「今之南郡、江夏、零陵、桂陽、武陵、長沙及漢中、汝南郡、盡楚分也」と、吳を「今之會稽、九江、丹陽、豫章、廬江、廣陵、六安、臨淮郡、盡吳分也」とする。さらに戰國の楚の國の定義としては、『戰國策』楚策一に「楚地西有黔中巫郡、東有夏州海陽、南有洞庭蒼梧、北有汾陘之塞郇陽、地方千里」とあるのが挙げられる。後世はこれらを踏まえ、南方長江流域の廣い地域を指す比喩的な用例と、どちらかというところ『史

記』での南楚・西楚に分類される、より狭い地域を具體的に指すケースとが見られるようである。

比喩的な用法の例は、「夏」などの正統もしくは中央という概念に對立するものとして位置づけられる。この例は廣く見られるが、ここでは音に關連しての用法にしばって挙げてみよう。

蓋し音に楚夏有る者、土風の乖なり。

〔『文選』卷五 左思「魏都賦」〕^④

晉世の義陽王典祠令任城呂忱、字林六卷を表上す、……忱の弟靜、別に故左校令李登聲類の法に放い、韻集五卷を作り、宮商角徵羽各一篇を爲す。而るに文字は兄と便ち是れ魯・衛、音讀は楚・夏、時に同じからざる有り。

〔『魏書』卷九一 衛瓘傳 江式傳〕^⑤

「音有楚夏」といい「音讀楚夏」というのは、まさに一つの概念から出た常套的言い回しなのであり、「楚」というのは、中原の正音に對する南方のお國ことば、を意味することになる。この比喩的な對比は、中原に對する南方、より單純化すれば「南北」という以上の具體性はない。特

に、後者ではその比喩的側面が強調され、呂忱の『字林』と弟の靜の『韻集』とが、字體も音も食い違っていることと譬えとして用いられ、もやは「南」の要素すら希薄になつてゐる。

次は、形容の對象が明らかに南方の楚の地に關係があり、土地のことば、もしくは訛といった意に用いられる例で、記述は極めて具體的である。

王大將軍（王覽のこと。『晉書』王祥傳に「漢末亂に遭い、母を扶し弟を掲え、覽は地を廬江に避け、隱居すること三十餘年」という）年少の時、舊に田舍名有りて、語音も亦楚なり。
〔『世說新語』豪爽第十三〕^⑥

長沙景王道憐、高祖の中弟なり……道憐素より才能無く、言音甚だ楚にして、舉止施爲、多諸鄙拙なり。

〔『宋書』卷五一、宗室 長沙王道憐傳〕^⑦

史臣曰く、高祖江南に累葉すと雖も、楚の言未だ變わらず、雅道風流、焉を聞く無き爾。

〔『宋書』卷五二、庾悅等傳論〕^⑧

また、楚辭を直接に指す場合もある。

隋時、釋道騫有りて善く之を讀み、能く楚聲を爲す。音韻清切にして、今に至る楚辭を傳うる者、皆騫公之音を祖とす。
〔『隋書』經籍志 楚辭目錄〕^⑨

このように、「楚」という語の意味として常に含まれるのは、中原から見た南方ということのみであり、それが比喩的に用いられる場合には廣く、特定のことがらの形容とすることであれば、具體的に用いられる。しかし、「楚」という語にもう一つのイメージがあったことを考慮する必要がある。すなわち、秦にとって代わるべき大國として復興した楚は、漢の好敵手としての地位を有し、その拮抗のさまは漢の陸賈に『楚漢春秋』があったことから推し量ることができるのだが、それによって「楚」という國名は、現朝の覇を脅かす敵國としてのイメージを長期にわたって背負うこととなった。それは、晉代においても同じで、『晉書』孝武帝紀には、「及爲清暑殿、有識者以爲清暑反爲楚聲、哀楚之徵也。俄而帝崩、晉祚自此傾矣」と、殿に名付けられた「清暑」という語の反語が「楚聲」となることから、皇帝の崩御という不吉な兆しを讀みとる話が見え

ている。¹⁰

翻って冒頭に挙げた二陸の作品を評する「楚」という語について考えるならば、具體的に『楚辭』と關連づけて論じようとする『文心雕龍』聲律篇の記述と、陸雲「與平原書」の記述とを、はたして同列に論ずることができるのであろうか。

ここで、陸雲「與平原書」に記される「楚」について検討していくことにしよう。この書簡は、陸機陸雲兄弟の詩文創作への考え方を知る上で非常に重要なものであるにもかかわらず、文章としての讀みにくさから十分に活用されてきたとはいいたいがたい。場合によっては、句讀を施すことにすら難澀することも少なくない。本稿で扱おうとする部分も例外ではなく、先人の解釋に簡單には肯うことのできない問題點がまだ多々存在している。ここでは煩を厭わず詳しく見ていくこととしよう。テキストは中華書局影印宋本『陸士龍文集』を用いた。これは慶元六年（一二〇〇年）華亭縣學刻『晉二俊文集』十卷の一本で（中華書局影印『陸士龍文集』序）、現北京圖書館所藏、現存する中で最も早く

且つ完全な傳本とされる。

音律に對して「楚」という語が現れるのは、宋本の篇次に從えば卷八「與平原書」第十の書簡である。¹¹陸雲は、執筆を期していた「登臺賦」をようやく仕上げ、その添削を兄に依頼する。執筆の遅れた理由と完成にこぎ着けたきっかけを述べた後で、彼は言う。

願小有損益一字兩字、不敢望多。

願わくは、小か一字兩字損益有らんことを、敢えて多きを望まず。

この言に續いて「楚」が現れる。

音楚、願兄便定之。兄音與獻彥之屬皆願。仲宣須賦獻與服繁。張公語雲云、兄文故自楚、須作文、爲思昔所識文、及視兄作誄、又令結使說音耳。

音の楚なるは、願わくは兄便ち之を定めよ。兄の音は「獻」「彥」の屬に與いては、皆「願」。仲宣『須（酒）賦』は「獻」と「服繁」なり。張公雲に語りて云えらく、兄の文故より楚なれば、須からく文を作るには、爲に昔識す所の文を思え、と。乃ち兄の作りし誄を視

れば、又「結」をして「説」の音に使わしむるのみ。

「音の楚なるは、願わくは兄便ち之を定めよ」とは、自らの音が「楚」であること、そしてそれが正すべき対象であることを明言したものである。それに續く「獻彥之屬」は從來解しがたい箇所で、「獻彥」なる人物名であろうと推察されたこともあった。^⑫しかし、この書簡の話題の中心にある陸雲「登臺賦」をいま一度見てみれば、この「獻彥」の二字は、人名などでは斷じてなく、まさにこの作品に用いられる韻字そのものである。以下にその部分を引用する。

清文昌之離宮兮、虛紫微而爲獻。

委普天之光宅兮、質率土之黎彥。〔登臺賦〕第八章

つまり、この部分は、韻字について具體的に助言を求めた箇所と理解されるのであり、そうすると、句讀も含めて全文を再度見直すことが必要となる。この二韻の明らかな模範が現存する仲宣、つまり王粲の作品に見られず、これまで動詞で讀まれてきた「皆願」の「願」もまた、韻字もしくは韻の代表字として讀み得る。つまりこの一文は、「登

臺賦」で用いた「獻・彥」という二字が、兄の韻類ではともに當時も同韻の「願」の類となる、と語っていることになるのだ。そして、王粲はそうではなかった、と陸雲は續ける。彼は書簡の中で、賦の手本、もしくは比較材料として、しばしば王粲の賦を取り上げており、そもそも「登臺賦」自體が、王粲「登樓賦」に觸發されて成ったものであることは言うを俟たない。「仲宣」に續く「須賦獻」の「獻」は、文脈からして、やはり韻字の「獻」を指すと思われるのだが、現存の王粲の賦中で「獻」を韻字に用いているのは、「獻・宴」という押韻を見せる『酒賦』のみである。

「須」の字は、宋本陸士龍集は「湏賦」と作っており、これが本來「酒」の字であった可能性も否定できないし、同じ「與平原書」中でも、「須」字には「さんずい」と「さんづくり」の二形が併存しており、宋本の基づくテキストで両者が異なる字であった可能性はさらに高くなる。とすれば、ひとまずここで「須賦」を「酒賦」に解することもあながち附會とは言えまい。それに續く「與服繁」〔漢魏六朝一百三家集〕は「與服索」につくる）は、非常にわかりにく

く、意を取りがたい。しかし書簡のこの部分が一貫して押韻について論じているからには、ここも何らかの押韻に關する具體的な問題を述べていると思われる。同じく「酒賦」に見られる「言・難・艱」という「繁」と同韻の押韻組（難のみは寒韻）の代表字として「繁」と考えるか、もしくは「服繁」自體が何らかの作品、またはその具體的な箇所を表すものというのも望まれる解釋の一つである。しかし、残念ながら、王粲や陸機・陸雲らの現存する作品群の中に、このような文字列と關わりのあるものはいま見出しがたい。ちなみに『漢魏六朝一百三家集』の「服索」で考えようとしても、回答は得られない。この部分は、暫時不明に付しておきたい。

續いて、「張公雲に語りて云えらく、兄の文は故自り楚なり」とあるのを見れば、陸機の文章もまた、もとは「楚」であったと評價されることがわかる。「爲に昔識す所の文を思い、乃ち兄の作りし誄を視」た、というのは、陸機の古い作品を参照しながら創作を行っていることを述べるが、その後に續く「又令結使說音耳」が解しがたい。「結」も人

陸機と「楚」（木津）

名に理解しようとする説があるが、本稿は、この書簡の後半が一貫して韻字を論じていると解しうることを重視し、「結・說」の二文字もやはり韻字に考えたい。陸機の現存する誄の多くは確かに入洛前の作品と考えうるのであるが、その中の「吳大司馬陸公誄」には「徹・實・哲・結・溢」という押韻が見られる。「結」は、中古音では屑韻、「說」は薛韻に屬し、次章で詳述するように、周祖謨氏の魏晉韻部^⑬によれば同じ屑部字ということになっているので、それに對してことさら同じだと述べる本條の言は、一見無意味に思われる。しかし、陸機陸雲らは、この屑部（周祖謨の魏晉韻）と質部（同）、さらに曷部（同）の同定に關して、大きな弱點を有していた。つまり「徹・哲・結」が屬する屑部と、「實・溢」の質部は、當時の一般的な押韻例では區別されていたのであるが、彼らはそれらを類繁に混用しているのだ。例えば書簡第十二の、「徹・察（ともに屑部）は皆日（質部）とは韻せず。思惟えども得る能わず、願わくは此の一字を賜え」^⑭や、第二十八「李氏は雪は列と韻すと云えども、曹は復た用いず。人亦た復た云へらく、曹の用うべ

からざる者は、音自ずから正を得難しと」^⑮など、この韻部に關する悩みは、各所に吐露されている。實作から一例を擧げてみよう。

《陸機》（質部は○、屑部は●）

密・察（演連珠之四）

裂・質・節・室（答賈謐之二）

烈・質（演連珠之四十六）

《陸雲》

烈・質・室・疾・溢（愁霖賦）

室・哲・烈・日（失題）

哲・逸・秩・穆（晉故豫章內史夏府君誄） 穆は屋部

日・徹・膝・恤（九愍悲郢）

但し、問題の「結」は「折・結」（鼓吹賦）「絶・結・滅」（演連珠之二十四）「結・悦・髮」（與弟士龍詩之五）のように、混用例中には用いられず、この字に關しては、ある程度正しき韻類の所屬を辨えていた可能性がある。その上で、入洛前に作った誄における混用を、「説」の韻に用いた、と指摘したとも解釋しうるのである。

このように、陸雲「與平原書」第十の後半部分は、自作「登臺賦」の添削を兄に求める中で、具體的に押韻に關する相談を持ち掛けており、それは「音が楚」であるという自覺と、やはり「もとは楚」であつた兄の音律意識を前提として言及なのである。

もちろん「楚」と指摘されたことがただちに押韻のことを指したものだとは言えないが、詩の韻律としてもっとも聽覺にあきらかであるべき押韻について見ても、果たして陸機が入洛前後でその特徴を變えたのかどうかは、作品のみからは判斷しにくい。明らかに入洛後のものとわかる作品にも、例えば、上に擧げた「答賈謐」の「裂・質・節・室」や「僚・條・稠・秋」（蕭蕭尤尤）など（韻は中古音）、次章で述べる吳出身の文人による作品に共通する押韻特徴を有したものを見出すことはたやすいのである。とりあえずここで押さえておくべきことは、陸機・陸雲ともに、詩文を作るにあたっては韻律への配慮を要求されていたこと、そして彼らに特有の特徴が「楚」であると指摘されていたことであり、そのこと自體は、のちにくわしく検討するよ

うに、作品からも確かめることができる。さらに、入洛後の陸雲が、その「楚」たる特徴を糾すために、陸機の古い作品の音律を復習していることは、注意しておいてよい。

『文心雕龍』聲律篇は言う。

又詩人綜韻、率多清切。楚辭辭楚、故訛韻實繁。及張華論韻、謂士衡多楚。文賦亦稱、知楚不易。可謂銜靈均之聲餘、失黃鍾之正響也。

又詩人の韻を綜ぶるは、率ね清切多し。楚辭は辭楚なり。故に訛韻實に繁たり。張華の韻を論ずるに及びて士衡は楚多しと謂う。文賦にも亦た楚と知れるも易えずと稱す。靈均の聲餘を銜みて黃鍾の正響を失すと謂う可きなり。

この「張華論韻」以下は、恐らく先の「與平原書」にいう議論と同じことならにもとづくと思われるが、『文心雕龍』では意圖的にそれを『楚辭』と結びつけようとしていて、そもその張華の指摘とは些か引用の趣旨が異なっている。「與平原書」では、正音からはずれた音、という指摘^⑤であったものを『楚辭』に結びつけたこと、さらに、現

陸機と「楚」(木津)

行の『文賦』には、「取足而不易」が近い表現として見えるのみで、ここで引くような「知楚不易」という語は見られないことも、劉勰の陸機評價の一端を示しているのではなかろうか。

ところが、入洛後は『楚辭』のすばらしさに開眼し、騷體の作品に取り組むようになった陸雲はともかく、陸機自身に騷體の作品は一つも残されていない。しかし、その作品の底流に流れる慷慨や絶望感、また、作品のあちこちで奏でられる、数限りない有聲無聲の音色を用いた過剰とも言える比喩表現、これらに對して、劉勰らが陸機の作品中に『楚辭』に通ずる風格を感じ取った可能性は否定できない。このことは、『楚辭』そのものへの六朝における評價と關わって別に考えていかねばならない問題であるが、本論においては、劉勰には陸機の韻律が正音をはずし「楚」風に流れており、自らもそれを知りながら改めようとしなかった、と認識されていたことを重視する。

二 陸機・陸雲詩文の押韻について

陸雲「與平原書」には、先に挙げたように、「徹、察は皆日とは韻せず。思惟えども得る能わず、願わくは此の一字を賜え」や「李氏云えらく、雪は列と韻するも、曹は復た用いず、と。人亦た復た云えらく、曹の用うべからざる者は、音自ずから正を得難し」などの、押韻に關する考えを述べたものがある。後者の「李氏」は、恐らくは魏の李登が撰した『聲類』^⑦を指し、「曹」とは、ここで引いた箇所直前に見える、曹志の著した『釋詁』二十七卷の内容を指すと思われる(曹志は曹植の末子、『晉書』卷五十に傳が見えるも、著作への言及は見えない)。「釋詁」がどのような著述であったかは、『隋書』經籍志にも取られておらず、もはや知る由もない。しかし『爾雅』の篇名を思わせる書名からは理解しにくいものの、「雪・列」など、同韻字に關する論議を含む内容であったことが、この記載からは推察できる。前章でも論じたように、ここに挙げられる「徹、察、日」、「雪、列」の諸字は、中古音というなら、それぞれ薛

韻(徹雪列)黠韻(察)質韻(日)という異なる韻に屬し、魏晉の頃もそれぞれ獨立して通押しないのが通例であった。しかし、二陸はこれらをすべて混亂してしまっていたようで、彼らの作品には、通押が少なからず見られる。「徹、察、日」の問題だけではなく、同じ韻部に屬していたはずの「雪、列」についてすら、押韻字に選ぶ決心がつかない頼りなさを、この手紙は吐露していることになる。

この通押例のみならず、陸機・陸雲兄弟の詩文の押韻には、いくつか魏晉期の他の詩人とは異なる顯著な特徴が見られる。以下にそれらの特徴から歸納した彼らの分部情況を、魏晉期の一般的な押韻情況と比較した表を挙げ、その特徴をまとめておくこととしよう。

比較のための基準としたのは、周祖謨一九八二「魏晉音與齊梁音」(『中華文史論叢』二三輯、『周祖謨語言文史論集』所收、浙江古籍出版社、一九八八)で、丁邦新『魏晉音韻研究』(中央研究院歷史語言研究所專刊六十五、臺北、一九七五)の成果を参考にした。また、最近、周祖謨『魏晉南北朝韻部之演變』(臺北、一九九六)が公にされ、隨時參照することがで

きた。韻名は、入聲を除き平聲で代表させる。陸機の押韻配列との對比に便利のように、周氏の韻部の配列を入れ替えたところがあるが、いちいち注記はしない。陸機・陸雲韻の検討に際しては、『陸機集』及び『陸雲集』（中華書局、中國古典文學基本叢書之一、一九八二・一九八八）を用いた。『陸機集』は、四部叢刊影印宋本『陸士衡文集』を、『陸雲集』は現北京圖書館藏宋慶元六年華亭縣學刻『陸士龍文集』を底本とし、四部叢刊本などにより校勘、總集・類書・史傳より逸詩文を補ったものである。

念のために言っておかねばならないのは、陸機・陸雲の詩文も、基本的には同時代の音韻の枠組みを著しくは越えていないということである。その上で、系統的に現れる通押の中から他とは異なる點をまとめるならば、以下のようなになる。それぞれに、その特徴を有する詩文の代表例を挙げた。某部と呼ぶのは、後に挙げる晋代の韻部名、某韻は中古音の韻名、用例は韻字のみを列べ、その後の中古音による韻名と作品名を付す。

- (1) 之部と哈部が同用され、支部・脂部は皆部と頻繁に

陸機と「楚」（木津）

通押する。去聲では脂部は泰部・祭部とも通押する。また、之部と支部・脂部が通押する例も見える。

例：「夷・垂・器・熙・黎・之」之脂脂去之支之「故吳丞相陸公詠」（陸雲）

「期・哉・之・詩」之哈之之「贈夏少明」（陸機）

「待・祀・在」哈上之上哈上「與弟清河」（陸機）

「器・蔚・綴・殺・最」脂去微去祭脂去祭泰「鼓吹賦」（陸機）

- (2) 侯部と宵部が區別されないこと。

例：「照・謬」宵去幽去「演連珠」第二十九（陸機）

「喬・遙・朝・休」宵宵宵尤「谷風」（陸雲）

- (3) 魚韻・虞韻・模韻を分かつ傾向があること。北人では、潘岳「關中詩」の「斧・舉・土・苦」虞上模上模上のように、區別しない。

例：「謳・趨」虞虞「吳趨行」（陸機）

「土・祐・祖・魯」模上模上模上「答賈謐」（陸機）

「廬・舒・疏・除・渠・徐・魚」魚魚魚魚魚魚「贈

顧彥先」（陸機）

中	古	音	魏	晉	二陸	宋	中	古	音	魏	晉	二陸	宋
沃	屋三等	燭「曷」	沃	沃	沃	沃	質	術	櫛	迄	物	沒	沒
職			職	職	職	職	屑	屑	屑	屑	屑	屑	屑
德			德	德	德	德	曷	曷	曷	曷	曷	曷	曷
藥			藥	藥	藥	藥	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉
鐸			鐸	鐸	鐸	鐸	盍	盍	盍	盍	盍	盍	盍
覺			覺	覺	覺	覺	緝	緝	緝	緝	緝	緝	緝
錫			錫	錫	錫	錫	合	合	合	合	合	合	合

- (4) 虞韻が侯・之・部間で通押する。
 例：「思・遊・憂・娛・流・俱・私」之尤尤虞尤
 虞之「贈顧尙書」(陸雲)
- (5) (3)の特徴の上で、模韻が歌部と通押する。
 例：「路・歩・度・夜・暮・露・素」模去模去模去
 麻去模去模去模去「歲暮賦」(陸雲)
- (6) 山攝韻すべてが同用され、眞・魂部と頻繁に通押すること。
 例：「天・先・玄・冠・園・蘭」先先先桓元寒「贈潘尼」(陸機)
- 「泯・振・民・天」眞眞眞先「答賈謐」(陸機)
 「人・天・珍・存」眞先眞魂「寒蟬賦」(陸雲)
 「文・珍・神・川」文眞眞仙「南衡」(陸雲)
 「賢・欽・臣・川・孫」元諄眞仙魂「七微」(陸機)など多數。
- (7) 質部と屑・曷部が通押すること。
 例：「密・察」質黠「演連珠第四」(陸機)
 「泄・忽」薛沒「白雲賦」(陸機)

中古音	魏	晉	二陸	宋	中古音	魏	晉	二陸	宋
陰聲	之	之	之	之	冬 江〔降〕 東三等 東一等 鍾江陽唐庚耕清青眞諄臻殷文痕魂寒桓刪山元仙先侵覃〔談〕監添凡	冬	冬	東	冬
	哈〔來〕	哈		哈		東	東		東
	灰〔梅〕					陽	陽	陽	陽
	皆〔戒〕	脂	脂	脂		庚	庚	庚	庚
	脂					眞	眞	眞	眞
	微	皆		皆			魂		文 魂む。元を合
	皆〔懷〕					寒	寒	先	寒
	哈〔開〕	支	支	支			先		先 く。元を除
	灰〔回〕					侵	侵	侵	侵
	齋〔夔〕					〔談〕	談	談	談
	支佳						鹽		鹽
	齊〔奚〕	宵	宵	宵		屋	屋	屋	屋
	脂〔地〕								
	豪肴	侯	侯	尤					
陽聲	宵蕭侯尤幽虞魚模歌戈麻祭霽怪〔屑〕泰夬廢怪〔介〕	魚	魚	虞魚模	入聲	屋	屋	屋	屋
	蒸	歌	歌	歌	屋一等 燭覺 沃〔僕〕				
	蒸	祭	祭	祭					
	登	泰	泰	泰					
	登								
	耕〔橙紘〕								

「轍・實・哲・結・溢」薛質薛屑質「吳大司馬陸公誄」(陸機)

これらの諸特徴は、陸機・陸雲兄弟に單獨で見られるものばかりでなく、彼らと同様、西晉王朝に出仕した吳の遺臣たちの詩文からも、この内の幾つかの特徴は見出すことができる。例えば、吳郡富春の人で、陸機の司馬として、軍内の規律を守らぬ孟超を斬るように勧め、陸機が殺された後も忠心を全うした孫拯の詩では、「贈陸士龍詩」十首の中に、上記(1)(2)(6)の特徴を有する押韻が見られ、陸機らの推薦を受けて入洛する賀循に便乗して洛陽に赴いた張翰の「贈張弋陽詩」七章には、(1)(2)の特徴が見え、東晉の初年に王導の司徒掾として仕えた會稽の人楊方の「合歡詩」五百首では、(2)(3)の特徴が見える。さらに東晉も末年近いころ、吳の楊羲らが神降ろしの際に書き留めた詩文の押韻字も、この特徴と多くの共通點を有していたことがわかつている。^⑩

一方、同時代の北人、例えば張華や潘岳らの押韻ではこれらの通押は見られない。例えば、張華の樂府・詩全四十

六首のうちで、先の周祖謨の歸納した韻部を越えた押韻組は、

「遲滋儕儕懷」脂之皆皆皆(「答何邵詩」第三首)

「晷鄙矢兕雉視否旨蟻水壓幾死美履軌」之之脂脂脂之脂支脂脂脂脂脂之(「遊獵篇」)

「穆德」屋德(「祖道趙王應詔詩」)

の三例しか見られないし、潘岳についても、やはり樂府・詩全五十一首のうち、

「麗蕙」支去祭(「拾遺詩」)

「沂遼畿湄夷依揮棹梨坻遲悲希歸」脂脂脂脂脂脂脂支脂脂脂脂脂(「金谷集作詩」)

「同臚空風容胸」東東東冬東東(「悼亡詩」第二首)の三例にしか見られない。

陳寅恪もいうように、魏晉以降、特に永嘉の亂による南渡後は、「中國」つまり「洛都」の音こそが正音であり、南音は、野鄙な音として認識されていて、ふだんの應酬でも、ましては詩文をつくる際にはあくまでも正音によることが、常識として求められていたと考えられる。陸機陸雲らは西

晉の洛都にあって、當然ながら吳の土音そのままに詩文を作ることはなく、押韻にも一定の「正音」化を行おうとしていたであろうことは想像に難くない。それにもかかわらず、「正音」化されたその押韻に、洛都の正音とのいささかのずれがあり、しかもそのずれについて同じ特徴を有する人々が集團として存在したこと、そしてその共通項が「吳」であることは、充分注意すべきことなのだ。

三 集團における陸機とその聲律觀の形成

さて、吳の遺臣として入洛した陸機の音への認識の形成過程を考える時、彼を去ること三百年の後、やはり南朝梁から召されて、北齊、隋に仕えた顔之推による綿密な言語觀察『顔子家訓』音辭篇など）や、さらには、その顔之推と、同じく南朝から北朝に移った蕭該らが多くを決したとされる『切韻』の成立を思い起こさずにはいられない。韻律の整備は一人の獨創にかかるものではなく、しばしば集團的な討議・交流の過程で形成されていくものだが、陸機もまた、西晉社會において孤立した存在であつたわけではなく、

陸機と「楚」(木津)

文人としての基盤をある一定の集團の中に置いていた。とは言つても、彼もその二十四友の一人であつた賈誼のサロンのことをここで言わんとするのではない。それは陸機にとつてはやはり處世であつて、より深いつながりはほかの集團に求めていたと思われるのである。

陸機・陸雲兄弟が入洛後、しばしば西晉の貴族たちの冷やかな對應を受けたことはよく知られている。そのような中であつて、陸機は南人として對決の姿勢を崩さなかつた。西晉の貴族社會に一定の基盤を築いた彼らは、相前後して入洛した吳の遺臣たちとともに、頻繁に後進の出仕を推薦していた。例えば、二陸と時期を同じく入洛して「三俊」と並び稱された顧榮(『晉書』顧榮傳)を始めとして、陸機に推薦されて入洛した賀循や郭詡(同賀循傳)、賀循の船に便乗して入洛した張翰、陸機が彼のために策問を行った紀瞻(同紀瞻傳)、さらに、吳の重臣の子弟でありながら、追い剥ぎを働いていた所を陸機に引き上げられた戴淵(同戴若思傳)、そして張暢(陸機「薦張暢表」)や、陸雲との往還詩で知られる鄭豐(陸雲「贈鄭曼季往返八首」)など、兄弟、

特に陸機が入洛した同郷者のリーダー的存在であつたことを示す資料は数多い。^{②①}

洛陽での彼らの交歡のさまは、次のような陸雲の書簡からも伺うことができる。

「會する毎に常に共に歌詠し、信に一面として歎吟せざるは無き也。」（陸雲「與陸典書」^{②②}）

さて、このような陸機を中心とする洛陽における吳人集團のうち、何人かは琴や音律に深く通じていたことが史料に記録される。例えば、前出の顧榮については、

顧彥先平生好琴、及喪、家人常以琴置靈牀上、張季鷹往哭之、不勝其慟、遂徑上牀、鼓琴、作數曲竟、撫琴曰、「顧彥先頗復賞此不。」因又大慟、遂不執孝子手而出。（『世說新語』傷逝）

顧彥先平生琴を好む。喪に及びて、家人常に琴を以て靈牀上に置く。張季鷹（注・張翰の字）往きて之を哭し、其の慟するに勝えず、遂に徑ちに牀に上り、琴を鼓す。數曲を作し竟り、琴を撫して曰く、「顧彥先頗ぶる復た此を賞せしや不や。」因りて又大いに慟し、遂に孝

子の手を執らずして出づ。（『世說新語』傷逝）と記される。^{②③}

ちなみに、ここに登場する張翰はやはり彼らと同じ吳の遺臣であり、吳土の孤菜や蓴羹、鱸魚の膾への思い斷ち難く、歸郷してしまつたことで後世に有名である。また彼には、ここに擧げた顧榮の靈前で琴を演奏した故事のほかにも、陸機に推薦されて入洛する途上であつた賀循の船中の琴の遊びに乗り込み、そのまま洛陽まで同行してしまつた、何とも氣ままな故事が見えている。^{②④}

賀司空入洛し命に赴き、太孫舍人爲り。吳の閭門を經、船中に在りて琴を彈ず。張季鷹本相識らず。先に金閭亭にあり。絃の甚だ清きを聞き、船を下りて賀に就き、因りて共に語れば、便ち大いに相い説ぶを知れり。賀に問う、「卿は何にか之かんと欲」と。賀曰く、「入洛して命に赴く、正に爾に路を進む」と。張曰く、「吾も亦北京に事有り」と。路に因りて寄載し、便ち賀と同じく發す。初め家に告げざれば、家人追問して廻ち知る。（『世說新語』任誕）

一方の賀循は、『宋書』樂志によれば、東晉王朝が、永嘉の亂後始めて江左に宗廟を建てようとした際、樂制定のため依據しうる舊典が失われたことを上議する立場にあった。

永嘉之亂、海内分崩、伶官樂器、皆沒於劉石。江左初立宗廟、尙書下太常祭祀所用樂名。太常賀循答云……永嘉之亂、海内分崩し、伶官樂器、皆劉石に沒す。江左に初めて宗廟を立て、尙書太常に祭祀用うる所の樂名を下す。太常賀循答えて云う……。

さらに、丹陽秣陵の人、紀瞻の傳『晉書』紀瞻傳にも、瞻性靜默、少交遊、好讀書、或手自抄寫、凡所著述、試賦牋表數十篇。兼解音樂、殆盡其妙。

瞻は性靜默にして、交遊少く、讀書を好む。或いは手自ら抄寫す。凡そ著述する所の試賦牋表數十篇。兼ねて音樂を解し、殆ど其の妙を盡くす。

と記される。

琴瑟は、當時の貴族であれば、當然のたしなみの一つではあったろうが、陸機周辺の吳人に、樂に通じていること

陸機と「楚」(木津)

を傳に特筆される人物が少なからずいたことは注意に値しよう。このように深い音樂への關心を有する人々が、先に引いた陸雲の手紙に記されるごとく、陸機らを中心に洛陽の地で管絃の場をとにもする機會を持ったことは十分予想され、その場では、當然ながら音樂を楽しみ、また詩文を賦することが伴っていたであろう。

當時の吳の文化は高橋和巳氏の言われるように、「無名の文藝」、つまり樂府に代表されるものであった。^②民間の樂府は、當時でもやはり音樂と密接な關係を有していたから、少々亂暴な言い方をすれば、吳といえは「樂府」、ひいてはそれに伴う「音樂」であつたのだ。先に挙げたとおり、陸機らと相前後して北上した南人たちに、ことさら音樂への造詣の深さを記録される人間が多數いることも、北人社會の彼らへの評價の一端を示している。そして、北人としては極めて珍しく彼らを高く評價し、入洛の手助けを惜しまなかつた張華自身が樂府の達人であり、一方では宮中の樂を正し、また新曲を作製する任にあつたことも忘れてはならないであろう。

このような環境にあって、陸機は、自らの立脚點を模索しながら、音楽さらに音聲を個人的かつ客觀的に捉えることが可能となったとは考えられはしまいか。あたかも、顔之推ら南人が陸法言の父の家に集まり、南北の風土や音韻の違いを論ずる中から、『切韻』という畫期的な韻書を生み出したように。

結 び

これまで、陸機という一人の人間に、音にまつわる異なつた二つの側面、つまり「楚」と批判される面と、文における聲律美にいち早く着目した面とが共存することについて、その押韻と北における南人としての環境を中心に論じてきた。その中で、「楚」と稱される陸機・陸雲兄弟の詩文の押韻は、同時代の分部情況に比してかなり異なる通押例を多く有すること、それが彼らの個人的、また時代的特質に規定されるよりも、むしろ地域的な集團の中に共通點が見出せることを明らかにした。そして、陸機・陸雲が樂府の名手であつた張華によって擁護され、洛陽における吳

の儒才たちの中心的存在になつていたこと、しかも、彼らは後の世には音楽への造詣の深さと共に語られたことも上文にて確認したとおりである。

東晉初年の頃、永嘉の亂を経て江南に逃げ延びてきた北人たちが、眞っ先に頼りにしたのは、かつては彼らによつて北人社會で冷遇された、紀瞻、顧榮、賀循ら吳の文人であつた。^②東晉以降、南北文化の衝突と融合の舞臺は江南の地に移る。北人の、佳節ごとに相集い宴席を設け、郷里を望んで涙する姿や『世說新語』言語篇^③、大舉して南下した北人貴族の影響を受け、ことばや歩き方、喪に望んでの哭の仕方まで變えてしまつた江南の有り様など（『抱朴子』外篇三「讒惑」^④）、その動搖のさまは隨所に語られる。南朝に爛熟した貴族文化の花が開き、「四聲八病」を始めとする緻密で玄妙な聲律論が整備されるには、陸機以後、さらに二百年の年月が必要であつた。

注

① 暨音聲之迭代、若五色之相宣、雖逝止之無常、固崎嶇而難便。苟達變而識次、猶開流以納泉。

② 拙論「美としての樂へ」(『中國文學報』第五十冊、一九九五年)。

③ 例えば、房玄齡『晉書』に引かれる、陸雲と荀隱の、「雲間・陸士龍」と「日下・荀鳴鶴」というやりとりは、「雲」が平、「日」が仄という風に、平仄がすべて對立する形に整えられている。(興膳宏「文學理論史上から見た『文賦』」『中國の文學理論』所收。筑摩書房)

④ 蓋言有楚夏者、土風之乖也。(『文選』卷五 左思「魏都賦」李善注「孫卿子曰、人居楚而楚、居夏而夏、非天性也」)

⑤ 晉世義陽王典祠令任城呂忱、表上字林六卷、……忱弟靜、別放故左校令李登聲類之法、作韻集五卷、宮商角徵羽各爲一篇、而文字與兄便是魯・衛、音讀楚夏、時有不同。(『魏書』卷九一 術藝傳 江式傳)

⑥ 王大將軍年少時、舊有田舍名、語音亦楚、武帝喚時賢共言伎藝事、人皆多有所知、唯王都無所關、意色殊惡、自言知打鼓吹、帝令取鼓與之、於坐振袖而起揚槌奮擊、音節諸捷、神起豪上、傍若無人、舉坐歎其雄爽。(『世說新語』豪爽第十三)

⑦ 長沙景王道憐、高祖中弟也……道憐素無才能、言音甚楚、舉止施爲、多諸鄙拙。(『宋書』卷五一、宗室 長沙王道憐傳)

⑧ 史臣曰、高祖雖累葉江南、楚言未變、雅道風流無聞焉爾。(『宋書』卷五二、庾悅等傳論)

⑨ 隋時有釋道鸞善讀之、能爲楚聲、音韻清切、至今傳楚辭者、皆祖鸞公之音、(『隋書』經籍志敘錄 楚辭目)

陸機と「楚」(木津)

⑩ 「清」の聲母に「暑」の韻母を組み合わせれば「楚」となり、「暑」の聲母に「清」の韻母を組み合わせれば「聲」となる。

⑪ 諸テキストのこの部分には錯簡が見られ、それについては松本幸男「四部叢刊本『興平原書』の錯簡問題と陸機の『吳書』撰定計畫」(『學林』23、一九九五年)が詳しく考證するが、本稿は参照に便であることを優先し、宋本の篇次にそのまま従う。

⑫ 佐藤利行著「陸雲研究」(白帝社、一九九〇)一四九頁。

陸雲が手紙の中でこのように韻字を用いて作品の具體的箇所を指すことは他にもあり、やはり佐藤氏が「誰のことか未詳」(同一六四頁)とされる「淵弦」も、直前に話題にされている「九愍」の「思戢鱗以遁沼、悲沉網之在淵。擯哀響於頽風、寓悲音於絕弦」を指すのは明らかである。

⑬ 周祖謨「魏晉音與齊梁音」(『中華文史論叢』23輯、北京、一九八二)など。第二章の四〇頁以下に再度詳しく論じる。

⑭ 原文は、「徹察皆不與日韻、思惟不能得、願賜此一字。」但し、この語については、書簡の内容から、雲の「九愍・悲郢」において、「徹」も「察」も「日」と押韻せぬことを知りながら、やむを得ず「徹」を韻字に採用したことを示す資料として「漢魏晉南北朝韻部演變研究(一)」(羅常培・周祖謨、北京科學出版社、一九五八)は紹介する。

⑮ 李氏云、雪與列韻、曹便復不用。人亦復云、曹不可用者、

音自難得正。

- ①⑥ 饒宗頤「陸機文賦理論與音樂之關係」『中國文學報』第十四冊（一九六二）では、棒辭に通ずる風格を有する、と解されるが、いまはその考えは取らない。

- ①⑦ 『隋書』經籍志經部小學類「聲類」十卷 魏左校令李登撰

- ①⑧ 曹志、苗之婦公、其婦及兒皆能作文。頃借其釋詢二十七卷、當欲百餘紙寫之。不知兄盡有不。

- ①⑨ 拙論『眞語』中の押韻字に見える言語的特性」（吉川忠夫編『中國古道教史研究』同朋舎、一九九二）。

- ②⑩ 陳寅恪「東晉南朝之吳語」『金明館叢稿二篇』上海古籍出版社、一九八〇）。

- ②⑪ 高橋和巳「陸機の傳記とその文學」『中國文學報』第十一冊、一九五九）には、鄭豐の陸雲への贈詩に「然れども其の勞め謙しみて土に接し、吐握して賢を待つこと、姬公の白屋に下り、洙泗の三千を養うと雖も、以て過る無き也」とあるを引く。また、佐藤利行『西晉文學研究』（白帝社、一九九五）にも專論がみられる。

- ②⑫ 雲再拜、巨卿在臺、高譽洋溢、洛邑之内、無不欽敬、東南之貴寶、眞不但會稽之篠蕩也。每會常共歌詠、信無一面不歎吟也。想方周旋攜手、散今日之思耳。雲再拜。

- ②⑬ 『晉書』卷六十八「顧榮傳」には、「顧榮字彥先、吳國吳人也、爲南土著姓。祖雅、吳丞相。父穆、宜都太守。榮機神朗悟、弱冠士吳、爲黃門侍郎、太子輔義都尉。吳平、與陸機

兄弟入洛、時人號爲三俊。例拜爲郎中、歷尙書郎、太子中舍人、延尉生。恒縱酒酣暢、謂友人張翰曰、惟酒可以忘憂、但無如作病何耳。……榮素好琴、及卒、家人常置琴於靈座。吳那張翰哭之慟、既而上牀鼓琴數曲、撫琴而歎曰、顧彥先復能賞此不。因、又慟哭、不弔喪主而去。子毗嗣、官至散騎侍郎」とある。

- ②⑭ 賀司空入洛赴命、爲太孫舍人。經吳閶門、在船中彈琴。張季鷹本不相識、先在金閶亭、聞絃甚清、下船就賀、因共語。便大相知說。問賀、「卿欲何之。」賀曰、「入洛赴命、正爾進路。」張曰、「吾亦有事北京。」因路寄載、便與賀同發。初不告家、家人追問通知。『世說新語』任誕篇 又、『晉書』卷九十二文苑傳「張翰傳」に、「張翰字季鷹、吳郡吳人。父儼、吳大鴻臚。翰有清才、善屬文、而縱任不拘、時人號爲『江東步兵』。會稽賀循赴命入洛、經吳閶門、於船中彈琴。翰初不相識、乃就循言譚、便大相欽悅。問循、知其入洛、翰曰、『吾亦有事北京』。便同載即去、而不告家人」とある。

- ②⑮ 高橋和巳前出論文。

- ②⑯ 及徙鎮建康、吳人不附、居月餘、士庶莫有至者、導患之。……會三月上巳、帝親觀禊、乘肩輿、具威儀、敕、導及諸名勝皆騎從。吳人紀瞻、顧榮、皆江南之望、竊視之、見其如此、咸驚懼、乃相率拜於道左。導因進計曰、「古之王者、莫不賓禮故老、存問風俗、虛己傾心、以招俊乂。況天下喪亂、九州分裂、大業草創、急於得人者乎。顧榮、賀循、此土之望、未

若引之以結人心。二子既至，則無不來矣。」帝乃使導躬造循，榮、二人皆應命而至，由是吳會風靡，百姓歸心焉。〔晉書〕卷六十五「王導傳」

元帝始過江，謂顧驃騎曰：「寄人國土，心常懷慚。」榮跪對曰：「臣聞王者以天下爲家，是以耿毫無定處。九鼎洛邑。願陛下勿遽都爲念。」〔世說新語〕言語篇

②⑦ 過江人士，每至暇日，相要出新亭飲宴。周顗中坐而歎曰：「風景不殊，舉目有江河之異。」皆相視流涕。惟導愀然變色曰：「當共勦力王室，克復神州，何至作楚囚相對泣邪。」衆收淚而謝之。〔晉書〕卷六十五「王導傳」

②⑧ 余謂廢已習之法，更勤苦以學中國之書，猶可不須也，況于乃有轉易其聲音，以效北語，既不能使，良似可恥可笑。所謂不得邯鄲之步，而有匍匐之嗤者，此猶其小者耳。及有遭喪者而學中國哭者，令忽然無復念之情。〔抱朴子〕外篇三「譏惑」